

Unconscious Discrimination Seen through Life-stories of Chinese International Students in Japan : From the Viewpoint of Microaggression

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 劉, 薇, 石黒, 武人 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1715

在日中国人留学生のライフストーリーにみる 無意識の差別

—マイクロアグレッションという視点から—

Unconscious Discrimination Seen through Life-stories
of Chinese International Students in Japan:
From the Viewpoint of Microaggression

劉 薇・石 黒 武 人

キーワード：マイクロアグレッション、中国人留学生、ライフストーリー、マジョリティ

1. 研究の背景および目的

差別の問題は、時代とともに、その捉え方に変化がみられ、人びとの関心は、比較的に「意識された差別」から「無意識の差別」へと新しい広がりを見せている。田原（1997: 19）は「無意識」の差別について、「差別が人間のエネルギーになっている部分もある」とし、「社会的な差別構造はなくすことができて、差別意識はなくなる」（同上）と指摘する。この指摘から敷衍して言えば、明らかな差別は減少傾向にあるが、逆に一見分かりづらい無意識の差別が社会に浸透する時代となったと言えるだろう。

上記の社会的潮流を反映するように、日本社会でもその兆候がみられ、2017年に示された法務省の外国人住民調査報告書によれば、差別やレイシズムといった語彙では語りにくい、非常に些細な発言や行為が「マイクロアグレッション」として取り上げられている。マイクロアグレッションのような捉えづらい差別的な言動は、人としての尊厳を傷つけ、また、周りにいる人びとの差別意識を助長することにもつながりかねず、多文化共生社会の実現を拒む大きな要因の一つとなる可能性がある（金, 2016）。

また、日本は、これまで政府が外国人留学生の積極的な受け入れを促し、また、少子高齢化による労働人口の減少などを背景とし、外国人労働者の受け入れを限定的な形ではあるが促進してきた（李, 2012）。しかし、受け入れ側である日本人の多くは、外国人がもっている異なる文化やライフスタイルなどを平等に扱う視点が欠落している場合がある（榎井, 2020）。國枝（2013）は、身近で些細な出来事から異質な他者に関する物語が生成され、ときには民族間、国家間の紛争にまで発展する可能性がある」と指摘した。たとえば、インターネットやSNSの発達した時代においては、政治家が外国人について無意識に発した言葉が、他国の人びとには差

別的だとして捉えられ、ニュースになることもある。しかしながら、そうした些細で身近な外国人に関する語りやそれに伴う行為、言い換えれば、マイクロアグレッションの一種が、日本社会においてどのような形で行われているかを明らかにし、また、そうしたマイクロアグレッションを低減する土台となる研究は未だ十分に行われているとは言い難い。

以上の背景に加え、留学生ならびに外国人労働者のなかでベトナムに次いで最も数が多いのが中国出身の人びとである（厚生労働省, 2021）。日本社会のなかで、その数が今後益々増えていくと考えられる中国人、とくに留学生に対してアルバイト先で日常的に行われているが見落としやすい微妙な差別や偏見をマイクロアグレッションという観点から捉えた調査は、未だ十分に行われていない。

そこで、本研究では、中国人留学生を対象に、マイクロアグレッションの事例を拾い上げ、その経験を詳細に聴き取るうえで有効だと考えられるライフストーリー・インタビューを実施することによって、彼ら彼女らが来日後の日常生活のなかで経験している差別や偏見、特にマイクロアグレッションとその経験の意味を明らかにすることを目標とする。さらに、マイクロアグレッションを生む土台となる背景社会にある要因を考察し、マイクロアグレッションを減少させ、中国人留学生と日本人が異文化コミュニケーションをよりスムーズに行うための考え方を提示したい。

2. 先行研究

ここでは、まず、マイクロアグレッションに深く関連する概念であるステレオタイプ、偏見、差別について述べ、その後、本研究の焦点であるマイクロアグレッションについて本研究における定義を示す。そのうえで、日本に在住する外国人が経験する被差別感とマイクロアグレッションに関わる諸研究を整理し、その傾向を踏まえ、本研究を位置づけたい。

2.1 ステレオタイプ、偏見、差別

上瀬（2002）によれば、ステレオタイプとは「ある集団の人びとに対し、多くの人が共通したイメージをもっていること」（p.2）を指し、「人びとを分けるカテゴリーの結びつき、そのカテゴリーに含まれる人が共通してもっている信じられている特徴のこと」（同上）である。ステレオタイプの中には、否定的評価や感情を伴っているものがある。このように、「非好意的な態度で対象の人びとを眺めたり、考えたり、感じたりする傾向」（長谷川, 2013: 65）は偏見に分類される。さらに、その偏見を行動に移すと差別となる（長谷川, 2013）。小坂（2017）によれば、差別は「ステレオタイプや偏見を通り越して、対象となる相手を傷つけるための悪質で意図的な発言や行為が伴う」（p. 71）。小坂（2017）では、悪質で意図的な差別が説明されたが、本研究では、悪意が無く、意図的でないケースも含め、日常的に行われている、なにげない、無意識の差別、つまり、マイクロアグレッションに焦点を当てる。

2.2 マイクロアグレッション

マイクロアグレッションは、1970年にアメリカの精神医学者であるチェスタ・ピアスによつ

て提唱された用語である（金, 2016）。コロンビア大学教授であるデラルド・ウィング・スー（2020）は、マイクロアグレッションについて次のように述べる。

マイクロアグレッションとは、ありふれた日常の中にある、ちょっとした言葉や行動や状況であり、意図の有無にかかわらず、特定の人や集団を標的とし、人種、ジェンダー、性的指向、宗教を軽視したり侮辱したりするような、敵意ある否定的な表現のことである。加害者はたいてい、自分が相手を貶めるようなやりとりをしてしまったことに気づいていない。

（スー [マイクロアグレッション研究会・訳] 2020: 34）

本研究では、スーの説明に依拠し、日常生活で経験される、中国人留学生を軽視したり、侮辱したりするような「ちょっとした言葉や行動や状況」に着目し、日本で暮らす中国人留学生のライフストーリーから該当する事例を拾い上げ、その経験の意味を探る。つまり、マイクロアグレッションが中国人留学生にどのように感じとられ、経験されているのかを究明する。

2.3 外国人の異文化適応における被差別感とマイクロアグレッション

では、次に、中国人留学生をはじめとする外国人留学生たちが、日本社会においてどのような適応過程を経て、その中でいかなる被差別感を経験しているのかを先行する諸研究に基づき整理したい。池田（2019）によれば、国籍、性別、教育歴などにおいて自分とは異なった人びとの存在を「異」と定義している。したがって、さまざまな「異」が我々のまわりに存在している。本研究では、自分とは立場が異なる人びとを池田に習って「異」と呼ぶこととする。その「異」をステレオタイプの的に捉え、「異」に対して自分の「あたりまえ」ととった行動が、意図していないにもかかわらず、時として「異」としてカテゴリー化された人を傷つける一種の差別となる。また、渡辺（2018）は、社会におけるマジョリティの日常の中に「あたりまえ」にある暮らしや流儀に「潜む差別」に焦点を当てる重要性を示唆した。以下に、こうしたマジョリティの「あたりまえ」から生まれる差別に関する具体的な研究例を示す。

2017年の法務省による外国人住民調査結果によれば、日本社会における差別・偏見の有無について、全国に暮らす外国人 4252 名にアンケート調査を実施し、過去 5 年の間に経験した差別について尋ねたところ、「知らない人からジロジロ見られた」、「職場や学校の人びとが外国人に対する偏見をもっていて、人間関係がうまくいかなかった」、「日本語がうまく使えないことで嫌がらせをうけた」、「人に話しかけたが無視された」、「バスや電車、ショッピングセンターなどの公的な場で自分を避けるようにされた」という具体例が挙げられた。

また、船山・筒井（2020）は、アジア諸国（ベトナム、ブータン、韓国、インドネシア、インド）の学生 8 名にインタビュー調査を実施し、日本人のアルバイト学生と比較して留学生たちは冷遇されているケースがあることを示した。たとえば、「挨拶しても挨拶してくれない」、「日本人には笑顔で話していたのに」留学生だけに冷たい態度で話すといった事例が挙げられている。

さらに、黄（2010）は、中国人日本語学校生 134 名を対象とし、自由回答式のアンケート調査を実施し、アルバイト先で経験される被差別感の内実を明らかにした。その内容をみると、

「外国人または中国人であるという理由でのアルバイト拒否」、「中国食品への否定」、「国籍への否定」など、出身国にかかわる事例が多い。このことは、アルバイト先で接触する日本人の多くが、中国人日本語学校生を日本人と区別し、さらに否定的な存在として認識していることを示唆している。

このように、日常生活における、なにげない発言や態度、マジョリティ側からすれば「それは考えすぎだ」と思われるような「ちょっとした言葉や行動」(スー, 2020: 34) も、時として相手を傷つけるマイクロアグレッションとなり(金, 2016)、被差別感を生んでいる。

上記のように、関連研究の蓄積が進められ、具体的な事例が示されているものの、いかなる場面で何をきっかけにこうした微細な差別、マイクロアグレッションが生じるのかといった実態は依然十分に明らかにされているとは言い難い。このような差別の一つ一つは、マジョリティ側には重大視されないかもしれないが、こうした差別が外国人の暮らしの中で継続されるならば、その否定的な影響は蓄積していくと考えられる。それゆえ、こうした差別の影響を深刻に受け止める必要がある。このような問題意識に基づき、本研究は、在日中国人留学生を対象とし、彼ら彼女らが日常生活のなかで経験する差別や偏見、とくにマイクロアグレッションの実態を明らかにすることを目指す。

3. 研究方法

本研究では、インタビューという場で語り手と聴き手の間で生成される現実を重視する「対話的構築主義」(桜井, 2002) に依拠したライフストーリー・インタビューを採用した。その理由は、ライフストーリー・インタビューが、在日中国人留学生個人の経験をその背景にあるマジョリティ社会との関わりも含めて詳細に読み解くことを可能にするからである。ここでは、その理論的枠組み、調査協力者、データ収集法、質問項目、分析方法および「作品化」(桜井・小林, 2005: 220) の方法について順に論じる。

3.1 対話的構築主義のライフストーリー研究

対話的構築主義のライフストーリー研究は、インタビューという場面における調査協力者と研究者との相互作用において紡ぎ出される語りを解釈することによって、調査協力者の主観的認識世界を明らかにするものである。桜井(2002)によれば、語り手が経験した出来事や社会過程の主観的意味を把握するためには、語り手自身の概念ないしカテゴリーの定義や語りのコンテキストを尊重する必要がある。この時、語り手が「何を語ったのか」という語りの内容に関心が集中しやすいが、その一方で、「いかに語ったのか」と、語り方にも注意を払う。「いかに語ったか」には、語り手とインタビュアーの関係性や、語りの登場人物と語り手の関係性などといった社会関係が示される。その社会関係が前提となって語りの意味が生成される。

桜井(2002)は、対話的構築主義の重要な特徴として「ライフストーリーの語り手が、かならずしも語り手があらかじめ保持していたものとしてインタビューの場に持ち出されたものではなく、語り手とインタビュアーとの相互行為を通して構築されるもの」(p. 28) と説明し、ライフストーリーが語り手とインタビュアーの「共同作品」(同上) であると述べている。

桜井（2002）は、語り手とインタビュアーとの間に生まれる「専門家／非専門家」「男性／女性」「年上／年下」といったさまざまな関係性を踏まえ、語りを「語り手とインタビュアーとの相互行為を通して構築されるものである」（p.28）とし、こうした社会関係を捉えつつ、語り手の経験の意味を分析、解釈する。なお、本調査でインタビューを実施したのは、当時、都内の大学院修士課程に在籍していた中国人留学生であった調査者であり、調査協力者と同じ中国人留学生という立場であった。この調査協力者と調査者の関係性によって、後述する多様なストーリーが引き出されたと考えられる。

3.2 調査協力者

調査協力者は、在日中国人留学生 6 名（男性 2 名、女性 4 名）である。性別、来日時期、所属、就労経験、使用言語とその頻度、日本語能力の詳細は表 1 のとおりである。なお、表中の情報はすべて調査時のものである。

表 1 調査協力者のプロフィール

協力者	性別	来日時期	所属	アルバイト 就労経験	言語の使用頻度	日本語 能力
A	男性	2017 年	専門学校 2 年	スーパー、不動産屋	中国語＞日本語	N1
B	女性	2017 年	専門学校 2 年	レストラン	中国語＞日本語	N1
C	女性	2016 年	大学院博士 課程前期 2 年	コンビニ、 家具メーカー	中国語＝日本語	N1
D	女性	2017 年	専門学校 2 年	居酒屋、レストラン、 不動産屋、翻訳	日本語＞中国語	N1
E	女性	2017 年	大学院博士 課程前期 2 年	居酒屋、スーパー、 レストラン	中国語＞日本語	N1
F	男性	2017 年	専門学校 2 年	コンビニ、ディスカウ ントストア、衣料品店	中国語＞日本語	N1

データ収集法は半構造化インタビューである。実際のインタビューを行う前に、研究の目的やインタビュー・データの取り扱いなどについて調査協力者に対して説明を行い、そのうえで承諾書に署名をもらいインタビューを開始した。質問事項は前もって用意されるが、質問事項の言語表現の詳細や順序までは決めておかず、その場で相手に応じて変えていくという形をとった。インタビューの時間はおよそ 1 時間で、使用言語は主に中国語であり、必要に応じて日本語も交えた。なお、本研究は、筆者が在籍していた大学院の研究倫理委員会の審査を経て、実施したものである。

3.3 調査項目

調査の項目は、基本事項を問う質問紙であるフェイスシートの設問（文末の添付資料を参照のこと）と下記に示すインタビューの質問項目からなる。質問項目は研究の目的に沿って筆者が案出したものである。

質問項目：

- 1) 对于现在的留学生活满意吗？（現在の留学生活に満足していますか。）
- 2) 来日本之前所预想的留学生活，和来日本之后实际的生活有什么不一样吗？（来日前に予想していた生活と来日後の生活とでは何か違うところがありますか。）
- 3) 作为一个外国人或者是中国人，在日本有受到过来自他人的偏见，差别待遇吗？（外国人または中国人として、誰かに偏見をもたれたり、差別を受けたりしたことはありますか。）
- 4) 遇到（上述的）偏见或者差别待遇的时候，当下的反应或做法是什么？现在的你，会有不一样的应对措施吗？（偏見や差別があった時にどう対応しましたか。今だったら違う対応しますか。）
- 5) 对于偏見和差别待遇，你是怎么想的？（偏見や差別に対してどう思いますか。）
- 6) 这些偏見，差别待遇等，对于现在的自己有带来什么影响吗？例如：人际关系，对日本的想法等当面。（偏見・差別は、現在の自分に何か影響はありますか。例えば、人間関係、対日態度等）

3.4 分析方法

桜井（2002）が示した分析項目〔下記1）と2）〕に依拠しつつ、本研究の目的に応じた分析項目（以下の3）を加え、調査協力者によって語られたストーリーを分析・解釈した。

1) 用語法：語り手がインタビューの中で用い、語り手の内在的視点、考え方を反映する言葉とその用い方を分析する。用語法の分析は、語り手が「所属する文化に固有の言語を使ったり、日常語の特有な使い方や言い回しをすることによって自分の世界を語ろうとする」（桜井, 2005: 17）という観点に立ち、語り手が頻繁に使う用語の意味を語り手の視点から把握しようと試みるためのものである。

2) ストーリー様式：語り手が個人の生活史上で体験したことについて語られるストーリーは、語り手の考え方や自己概念や自己と社会の関係を表している。ストーリー様式として、「モデル・ストーリー」、「マスター・ナラティブ」や「新しいストーリー」がある。桜井・小林（2005）によれば、「モデル・ストーリー」は、「人びとが差別の現実を語ろうとするときその語り方を引用したり参照したりするモデルとなるストーリー」（p. 175）である。「これまで黙して語ることがなかった人たちが、こうしたモデル・ストーリーを参照することで自己を語るが可能になり、またコミュニティの仲間を相互に確認し合うことができる」（桜井・小林, 2005: 177-178）のである。

また、「マスター・ナラティブ」とは、「コミュニティをこえて社会的に機能するイデオロギーであり、文化的慣習や規範を表現するストーリーであるとともに、ときにポリティカル・コレクトな（政治的に妥当な）表現形態をとりうるストーリーでもある」（桜井・小林, 2005: 178）。日本社会で流通するマスター・ナラティブとして、たとえば、外国人数の増加により、犯罪の

件数も増す、といったものが挙げられる。

最後に、モデル・ストーリーを参照しつつも、そのストーリーからずれつつ、語り手個人が自分の独自のコンテキストに沿って語る「新しいストーリー」(alternative story)がある(桜井・小林, 2005)。調査者という研究者コミュニティから来た聴き手がいることで、このような新しいストーリーの生成の契機となる場となりうる(同上)。そのため、聴き手としての調査者の存在により、調査協力者がこれまで語りづらかった、あるいは語り切れなかったマイクロアグレッションのあり様を語る場や機会が生まれるのである。その中で、調査協力者たちは自己と社会の関係、そしてその関係のなかで位置付けられるアイデンティティの変容などを多面的に語りうる(同上)。これは、中国人留学生にも当てはまり、新しいストーリー、そして留学生たちと日本社会との関係におけるアイデンティティに関する語りの生成が期待できる。

3) 経験されている問題点: マイクロアグレッションの概念に注目し、微細な差別や偏見がどのように生成されるのかを例証する。本研究で、協力者の語りを丁寧に聴き、協力者の内在的視点からマイクロアグレッションと感じられる場面やケースを明らかにする。2) のストーリー様式に着目することで拾い上げられるストーリーでは、ポジティブ、ネガティブ双方の経験が語られ、また、そうした経験の土台となる語り手の考え方や語り手が背景とする社会関係などが含まれる。この3つ目の分析の焦点は、2) に基づき、さまざまな経験のなかでも、本研究の焦点であり、語り手によって経験されている問題点を特に拾い上げるためのものである。

3.5 作品化の方法

桜井・小林(2005)によれば、ライフストーリー研究というジャンルでは、調査結果をまとめること、つまり、論文化することを「作品化」(p.220)ということがある。「作品化」という表現を使うのは、その前提に次のような研究の立場があるからである。すなわち、インタビュー・データ自体が、研究者の影響を受ける対話的な構築物であること、そして、論文自体も客観的なものと位置づけるのではなく、研究者の視点・目的が研究結果の編集・提示方法に影響を及ぼすことを認めるという立場である。以下に、作品化の方法について示す。「聞き手であり研究者である<わたし>は、想定している読者に向けて文章の構成を考え、そのなかに語りを組み込んでいく」(八木, 2015:154)。そうした研究者の介在を認める構築主義的な立場から示される知見であることを象徴的に表現するために、客観性とながりが深い「論文」という表現ではなく、「作品化」という言葉が用いられることがある。

まず、対話的構築主義の手法として、1) インタビューにおける調査協力者のライフストーリーだけではなく、調査者とのやりとりも分析の対象とするため、多くの場合、調査者の語りもそのまま記述し、分析の範疇に入れる。しかしながら、全てのインタビューのやりとりを紹介するのではなく、研究目的に合う重要な相互のやりとりを選択的に提示する。もちろん、2) やりとり自体が重要でない場合は、調査者の語りは省略し、調査協力者の中国人留学生が示す典型的、もしくは独自の語りのみ提示する。また、3) ストーリーが長すぎる場合は、中略を用いて関連する部分だけを呈示する。本研究では、研究の目的と照らしてストーリーを選択した結果、2)、3) の形をとった。なお、2) や3) も、インタビューにおいて調査者(聴き手)との関わりを介して語られた対話的構築物である点に留意されたい。

本研究では、まず、語り（ストーリー）を示し、その直後に筆者の分析・解釈を書く「二重奏形式」（桜井・小林, 2005: 230）という記述法をとる。二重奏形式では、「語り手の語りを入れるパートと書き手/研究者の解説や議論のパートを交互に繰り返しながら呈示する」（同上）。その際、調査者と調査協力者の中国語による語りには、その日本語訳を併記する。なぜ二重奏形式という形をとるかという点については、語りと解釈が相互に示されることで、対話的構築物である語りをさらに研究者が解釈している、という研究者により二重の関わりや研究成果自体が構築物であることを読み手にわかりやすく示すためであるからと考えられる。

上述してきたとおり、対話的構築主義の主旨は、さまざまな人びとの主観的認識世界を明らかにすることである。その目的を作品化のプロセスに反映させる一つの方法が、オスカー・ルイスによって『サンチェスの子どもたち』で使われた「羅生門的テクニック」といわれるものである。それは、「一つの出来事を様々な人々の語りを重なりあわせてその多面性を引き出していく」（桜井・小林, 2005: 231）。調査結果では、協力者たちが似たような出来事に対して、さまざまな観点から考え、語る様子を例示し、個々人の意味世界を探究すると同時に、語り手たちが共有する経験の意味も明らかにする。

4. 調査結果

調査協力者たちが日常生活の中で差別や偏見、特にマイクロアグレッションにさらされた際の具体例とその経験の意味を分析、解釈した内容を整理して以下に示す。

4.1 用語の分析とストーリー様式

インタビューをした6名のうち、5名が自分は「外国人」として日本で偏見や差別を経験していると語った。残りの1名は明らかに悪意がある差別を受けたことはないが、周りの友だちからそういう話を聞いたことがあると述べた。調査協力者の語りから、本研究が問題の場としているアルバイト先は偏見や差別が最も発生しやすい場所である。例えば、日本人顧客がレジで名札を見て、外国人と分かると、話し方が無礼になったり、難癖をつけたりするといった体験、あるいは、日本人ではない、つまり、「外国人だから」という理由で信頼できないため、「日本人のスタッフを呼んでくれ」と言われた体験、また、外国人だから「いくら話してもわかってくれない」と言われた体験が示された。さらに、コミュニケーションコストを減らすために外国人を避けたい日本人がいるというストーリーも示された。では、以下に具体的なストーリーとその分析・解釈を提示する。

4.1.1 「外人」と「私たち」

多くの人は日常的に「私たち」という一定の集団を指し示す言葉／用語を頻繁に使っている。その際、人びとは、「私たち」に属する人は「ウチ」とし、その範疇から外れる人は「ソト」に分類し、認識する傾向がある。「ソト」に該当する「外人」や「外国人」という表現を日常生活の中でなにげなく使う人がある。Fさんは、「外人」や「外国人」という二つの言葉について、次のようなストーリーを語った。

ストーリー1 外人は外国人の「ただの略語」か

協力者 F: 日语有个词叫**外人**和**外国人**，对于我来说可能就是会有点偏见和歧视的意思。可能有的日本人觉得**外人**是**外国人**的简称。但其实我觉得对于中文里讲的话，外国人就是别的国家的人，但是外人来讲的话就是跟我们不一样的人，你不属于我们的人。

（訳）日本語には**外人**と**外国人**という言葉があります。私からすると、少し偏見や差別の意味があるように感じます。日本人の中ではただの略語だと思っている人もいるかもしれませんが、中国語で言うと、**外国人**は他の国の人ですが、**外人**は私たちと違う人、あなたは私たちに属さない人です。

この語りから分かるように、語り手の内在的視点では、「外人」というなにげない言葉は単なる略語ではなく、偏見と差別の意味が含まれていることがわかる。この語りでは、語り手の母語である中国語における「外人」という言葉の解釈が介在しており、語り手によれば、「外人」は、自国人とは異なり、自国人である「私たち」には「属さない人」だと語っている。この認識に立てば、「外人」という言葉は、語り手の認識世界のなかで、疎外感ひいては被差別感を与えうるものであることを示唆している。したがって、「外人」の使用は、語り手が「ただの略語だと思っている」という語りで暗示するように、あたりまえに「外人」と言う者が考えている以上に留学生に疎外感を与えるマイクロアグレッションであると推察できる。

「外人」という言葉の使用が不適切であることは、一般的にもこれまで指摘されてきたが（木下, 2019）、2020年代でも未だにこうした言語行為が繰り返されていることがうかがえる。「外人」という言葉のなにげない使用は、その受け手に偏見や差別を感じさせる行為となりうる。「外人」という言葉を使用する多くの人びとは、その言葉を「外国人」の短縮語として差別の意識がない形で用いたり、場合によっては肯定的な意味でも用いたりする（岡本, 2017）。そのため、「外人」という言葉が、留学生が感じる上記のような差別的な側面をもちうることに無自覚であることが多い。したがって、中国人留学生に対して日本人が外人という言葉が無自覚に使い続けると、中国人留学生と日本人との間に溝が生まれる可能性がある。

4.1.2 日本型のコミュニケーション

日本文化はハイ・コンテクスト文化であることから、「空気を読む」ことや「状況を察する」ことが重視されている（ホール, 1979）。ハイ・コンテクスト文化では、話し手と聴き手の間の文化的背景・文脈の共通性が高く、言語以外の状況や文脈によって多くの情報が伝達される。一方、ロー・コンテクストの文化では、両者の間に共通項が少ないため、できるだけ言語化し、分かりやすいメッセージを伝え、曖昧さを排除することが求められている。日本と中国は同じアジアの国であり、両国ともハイ・コンテクスト文化と見なされるが（メイヤー, 2015）、背景にある文化的コンテクストに異なる点もあるため、お互いに理解できない場合もある。Eさんは日本人同士では全てを言わなくても話が通じるが、彼女にとっては直接的指示がないと「何をすべきかが本当に分からない」と語った。

ストーリー2 マイクロアグレッションとしての曖昧なコミュニケーション

協力者 E: 日本人は那种, 不说也能懂。日本人就是重视那种, 叫什么察し合い、你自己能观察到的, 不说也能懂的。但是中国人, 是那种你不说来我不懂的文化, 所以就是两个文化不一样。中国是話し合い, 但是日本人是察し合い, 你必须得观察别人这种。你(日本人)完全不讲, 通过一些毫无关系的动作、行为, 我真的是不知道要干嘛。

(訳) 日本人はそういうものだ、言わなくても分かる。日本人は察し合いを重視している。自分で察することができる、言わなくても分かる。しかし、中国人はあなたが話さないと、私分からない文化だ。だから、二つの文化が違う。中国人は話し合い、日本人は察し合い。あなたがほかの人を観察しなければならない。日本人は何らかの無関係なジェスチャー、行為をして、完全に何も言わないから、何をすべきかが私は本当に分からない。

「一を聞いて十を知る」という定型句に象徴されるような察し合う文化は、日本型コミュニケーションの特徴の一つと考えられる。多くの日本人が曖昧な言葉を使ったり、婉曲的な言い方をしたりするのは、他人への思いやりである場合が多い。しかし、日本で暮している外国人にとって、曖昧な表現は負担になる恐れがある。それは「完全に何も言わないから、何をすべきかが私は本当に分からない」という E さんの話からもわかる。場合によって、日本人が日常生活で直接的な言い方をし、アルバイト先での明示的指示をできれば、外国人はうまく対応できるようになると言えよう。こうした明示的指示をせずに、曖昧なコミュニケーションを繰り返すということは、実質的に日本型のコミュニケーションを押し付ける形となり、中国人留学生個人の感覚によっては不快感や疎外感をもつ要因となりうる。したがって、日本社会におけるあたりまえのコミュニケーションの積み重ねが、マイクロアグレッションとして受け取られる可能性があると言えよう。

次に、在日中国人留学生がより明らかな形で実際に経験しているマイクロアグレッションについて論じる。

4.2 経験されているマイクロアグレッション

ここでは、マイクロアグレッションに注目し、多くの日本人によって日常的に行われている「あたりまえ」が、一般には差別とはみなされず、見落としやすい言動であり、そのような微細な偏見や差別が、中国人留学生の視点から、どのような場面で、いかに経験されているのかを例証する。

4.2.1 無意識の差別的言動は人を傷つける

マイクロアグレッションには、言葉によるものと非言語によるものがある。まず、言葉は人とのコミュニケーションには不可欠なものであり、言葉を使って自分の考えや気持ちを表現することができる。しかし、言葉は時として人を傷つけている。言葉によるマイクロアグレッションに苦しめられている外国人は日本にもいる。例えば、B さんは、「アルバイト先で、(日本

人は）洗い場の仕事より、接客の仕事のほうが優れていると思っている。店長は私に洗い場の仕事しかさせないから、他の日本人同僚は私に「洗い場人間」というあだ名をつけた。」という体験を語った。Bさんのことを「洗い場人間」と呼ぶことは言葉による明確なマイクロアグレッションと言える。こうした状況に対して、Bさんは「ただ彼らがかわいそうだと思ってた」と語った。つまり、差別をしている日本人側に対して、怒りや憤りを超えて憐れみの感情を抱いている。次に、こうした言葉によるマイクロアグレッションが非言語情報（名札）によって突然誘発されたマイクロアグレッションの事例であるCさんのストーリーを示そう。

ストーリー3「外国人」であるために強要される上下関係

協力者 C :那个时候我刚开始打工, 其实很紧张。装袋子的时候, 我把胶带贴在了上面的地方, 但那个也是我看我们店的一个阿姨教别人的时候这样说过, 我就这样贴了。然后那个客人就指着说「ここでもう一つ貼ってもらっていい」。然后我当时还没想那么多, 没意识到她不高兴, 然后后面她突然又说「こんなところで貼るって初めて見たよ」。然后她就开始了一段很长的不满和说教。如果只到这里结束的话, 我还不觉得受到了差别。因为她只是纯粹觉得你这个工作做的我不满意。可是在那之后, 看到我的名札了, 然后她就说「あ、日本人じゃないんだ」。然后她就开始了, 说我告诉你在日本应该这样这样的, 店員さん应该这样这样。最后她说了一句话, 她那个语气我到现在都记得, 说了一句「勉強して」。我当时真的是好想哭, 好委屈。……当时真的是刚来日本, 刚开始打工, 就是都是一个刚开始的状态。当时会觉得如果我不是一个外国人, 你是不是就不会这样说我了。那次对我冲击很大, 从那之后, 我就更害怕了, 就心理阴影了。

（訳）その時はアルバイトを始めたばかりで、実はすごく緊張していた。商品を袋詰めする時、テープをレジ袋の上に貼っておいた。それは私が店の先輩が他の人を教えるとき、そう言ったから、私もそのように貼った。そして、お客さんが指差しながら「ここでもう一つ貼ってもらっていい」と言った。当時の私はそんなにたくさん考えていなかったし、お客さんが不機嫌になったことにも気付かなかった。そして、お客さんは突然「こんなところに貼るって初めて見たよ」と言った。その後は、非常に長い不満と説教を言い始めた。もしここで終わったら、まだそれを差別とは思わなかった。お客さんはおそらく単なる私の仕事に対してクレームをただけ。しかしその後、私の名札を見て、「あ、日本人じゃないんだ」と言った。それで「教えてあげるね、日本で〇〇すべきだとか、店員さんは〇〇すべきだとか」と。最後は「勉強して」と言った、その口調は今でも覚えている。当時は本当に泣きたいし、悔しかった。（中略）その時は本当に日本に来たばかりで、アルバイトを始めたばかりで、すべては始まったばかりの状態だった。もし私は外国人でなければ、そんなことを言われなかっただろうと思った。そのことは私にとって衝撃がとても大きかった。それ以降、私はもっと怖くなって、トラウマになった。

上記のように、名札によって得られた情報（日本名ではない名前）を発端として、「日本人じ

やないんだ」「勉強して」といった言葉が客の口から滑り出ている様子が語られた。ここでCさんは先輩が教えた通りにテープを貼ったにもかかわらず、日本人の客から非難され、その非難の根拠として、「日本人じゃなんいだ」という発言からわかるように、人種もしくは国籍の違いを指摘された。しかし、先輩の指示どおりに仕事をしたCさんにとっては、非難の対象となった仕事に関して人種や国籍は無関係である。したがって、言われた側も決して気分は良くなく、不当な理由で非難されたため、「本当に泣きたいし、悔しかった」、また「私にとって衝撃がとても大きかった。それ以降、私はもっと怖くなって、トラウマになった。」と述べた。この「怖くなった」「トラウマ」という語りから、Cさんが深く傷ついている様子がうかがえる。

「非常に長い不満と説教を言い始めた。もしここで終わったら、まだそれを差別とは思わなかった。客はおそらく単なる私の仕事に対してクレームをしただけ」とCさんは語っている。しかし、客がCさんの名札を見て外国人と知ったとたんに、「教えてあげる」「勉強して」と言い、「その口調は今でも覚えている」という語りが示すように、突然見下するような態度をとったことがわかる。この相互行為では、日本人である顧客の言葉により、顧客と外国人であるCさんの間で上下関係が暗に前提とされている。人種や国籍を理由に上下関係を強いられたCさんは「もし私は外国人でなければ、そんなことを言われなかっただろうと思った」と語り、これを外国人であることに基づく差別だと認識している。さらに、「もっと怖くなって、トラウマになった」という語りから、Cさんがトラブルの後に至った深刻な心理的状态がうかがえる。その心理状態と関連するCさんの別の語りが以下のストーリーである。

ストーリー4 差別がもたらす「トラウマ」とその重大性

協力者C: 我本身性格就是一个小心翼翼的人，来到日本之后呢，受环境影响，我就变得更小心翼翼了。然后又碰到一些比较差别的事情之后呢，我就更害怕了。而且那个时候就会很介意，别人会不会因为我是外国人的事情，就会差别对待我啊什么之类的。

(訳) もともと自分自身は細かいことに気を配る、物事に対して注意深く接する性格だ。日本に来た後、環境の影響を受けて、自らの行動はさらに慎重になった。そして、少しでも差別と感ずることがあったから、もっと怖くなってしまった。また、その時にすごく気になるのは、他の人は私が外国人だから私を差別するのか。

Cさんは「日本に来た後、環境の影響を受けて、自らの行動はさらに慎重になった」と述べた。この語りから、異文化適応過程にいたCさんは日本社会を受け入れることに戸惑い、性格と日常の行動がさらに慎重になったことがわかる。例えば、「少しでも差別と感ずることがあったから、もっと怖くなってしまった」という語りには、Cさんの性格はより敏感になり、不安感が強くなったことがうかがえる。そして、Cさんは「他の人は私が外国人だから私を差別するのか」のような考えを当時もっており、その考えに基づき、日本人との関わりには怖さを感じている。上記のストーリー3において日本人顧客がテープの貼り方を注意した事例がこうした考えを生み出したきっかけの一つであると考えられる。外国人であることを理由に差別を受け、心理的にショックを受けるモデル・ストーリーは多くあると推察されるが、Cさんの語り

は、基本的には、モデル・ストーリーの沿ったものだが、「トラウマ」という言葉を用いてその重大性を伝える新しいストーリー（alternative story）であるとも言えるだろう。

上述した通り、無意識のうちに行われた差別的な言動が、受け手にとっては、場合によって「トラウマ」と形容される状態にまで発展する恐れがあり、それは、個人の中に長く記憶される痛みの残留とも言える。そのため、こうしたマイクロアグレッションのような見えづらいが大きなインパクトを与えうる差別を社会全体で注視していく必要があるだろう。

われわれは偏見や差別と聞く時、「自分には関係ない」、「自分にはしていない」と思う傾向がある（野寺, 2011）。しかしながら、些細な言動で無意識・無自覚に他の人を不快にさせたり、傷つけたりする。具体的に言えば、留学生が日本の暮らして困ることの一つは、不自然な日本語に対する日本人（日本語母語話者）の許容度の低さである。例えば、日本人の前で話す時、日本語の発音や言い方が少しでも不自然になると、あからさまに嫌な顔をされたり、笑われたりする例を挙げることができる。Bさんは以下のように語った。

ストーリー5 日本語能力＝個人の能力への憤り

協力者 B：怎么说，那时候我刚来日本嘛，口语不是那么好，但也是 N2 水平。日本人就会因为我的口语不好，觉得我是没有能力的人，工作不行。……还有就是，打工的时候，现场出了任何错误，比如有菜上错了，他们就会首先来问是不是我干的。

（訳）なんて言うか、その時は日本に来たばかりで、日本語をうまくしゃべれなかった。でも、もう N2 のレベルだ。けれども、日本人は私が話すことをうまくできないため、能力ない人、仕事はダメな人と思う。（中略）また、バイトする時、現場で何かミスがあったら、例えば、料理を間違えて出したとか、彼ら（店の日本人）まずは私がやったのかと聞く。

上記の語りから、Bさんは、「私（Bさん）が話すことをうまくできないため」、「能力ない人、仕事はダメな人」であると短絡的に理解されることに対して不満をもっていることがわかる。つまり、Bさんは、中国人留学生に対して、会話能力という一つの基準で、その人の仕事の能力についてまで評価されるのは不適切だと考えている。また、「現場で何かミスがあったら、彼ら（店の日本人）まずは私がやったのかと聞く」という語りから、店の日本人は、仕事の現場で、まずBさんがミスをしたか否かを聞くということが常態化していることが読みとれる。つまり、Bさんは、店の日本人から間違いを犯す者として扱われているという経験をしていることがわかる。この語りから、その背景に、Bさんの日本語（会話）能力があり、それに基づく日本人による仕事能力の評価があると考えられる。

上述したさまざまなストーリーを通じ、在日中国人留学生が身を置く環境の中に、マジョリティ側には見えづらい差別、すなわち、マイクロアグレッションの事例が少なくない現状があると推察できる。しかも、マイクロアグレッションをする側は、自分の言語や行動が他人を傷つけてしまったことを十分には自覚していない可能性がある。こうしたマイクロアグレッションに注意を払わずにそのまま放置すると、中国人留学生は厳しい状況に置かれてしまう。

では、次に、中国人留学生が身を置く現実の日本社会に関して、協力者たちがいかに語って

いるのかについて、さらにストーリーを示したい。

4.2.2 中国人留学生が直面している日本社会の現実

多くの日本人は電車の中で静かにすることは、他人に迷惑をかけないためだと認識している。しかしその一方で、外国人はその日本特有のマナーに十分に慣れていない場合もあり、常識として知ってはいても日本人らしく振る舞えないこともある。たとえば、Cさんは「すごく小さな声で話しているのに、隣に座っている日本人のおじさんは頭をあげて、不機嫌な顔でチェックと舌打ちした。ずっと何かぶつぶつぶやいている」と語り、「日本人にとって、外国語を耳にすると耳障りになるかもしれない」と解釈している。

一方、Aさんは「電車に乗る時、周りの日本人は自分が中国人と気づき、すぐ場所を移動したりする」というマイクロアグレッションに対して「理解できる」と語った。「私たちは黒人と接触する時も同じだよ、無意識に距離を保つ」と語り、Aさんは自分の立場を変えて、日本人側の視点に共感している。ただし、Aさんは、ここで「黒人」を差別の対象としている。つまり、自身の加害性も認めつつ、Aさん独自のやり方で日本社会に現実にある差別を説明している。

上記のように、日本人が考えるマナーに適切に合わせることができないことがある外国人留学生と日本人の間である種の誤解が生じてしまうことが示された。つまり、外国人留学生の中には、マナーを理解してはいるがそれをうまく実践できない者もいる。一方で、日本人の視点では、実践できないことは、マナーを知らないことという理解になりうるのである。敷衍すれば、異文化の壁を乗り越えるのは容易ではない、という異文化コミュニケーションの難しさを認識し、異文化を越えて自国に来る人びとに対してより寛容な態度がマジョリティ社会には求められていると言えよう。

また、Fさんは一部の日本人は外国人を避けたり、接しなかったりすることがあることを次のように語った。

ストーリー6 名札で生まれるマイクロアグレッション

協力者 F: 日本人会因为你是外国人，去逃避，不跟你接触，不跟你讲话。我不知道是不是因为日本人对于时间观念很厳しい，他们会觉得跟你讲话是一件很浪费时间的事情。比如说，你在收银的时候，他来问个什么东西。现在戴口罩嘛，你也懂日本人有些讲话声音很小，你想让他再说一遍的时候呢，他看了一眼我的名牌，就说一句「あ、大丈夫です」。然后就会去找别的店员，找个日本人。就觉得你听不懂，他也不想浪费他自己的时间。就觉得明明是他们自己的问题，为什么会反过来。逆ギレ不是吗？其实很多外国人是能听懂日语的，不知道日本人是对于自己的一种不自信还是什么，就是一种懒得跟你讲，懒得占用我自己的时间的感觉。不懂他们的想法，大概是会觉得跟亚洲国家的外国人接触，他们可能会觉得掉价，掉份儿。……我觉得白人在日本生活的太好了。就之前接触的白人，他们都在日本待了7-8年，很久很久那种。日语也不会说的那种，但生活的很好。

(訳) 日本人はあなたが外国人のため、避けたり、接触しなかったり、話しかけなかったりとか。日本人は時間に対して厳しいかどうかは分からないが、彼らはあなたと話すことは時

間の無駄だと思っているかもしれない。例えば、レジで働く時、お客さんが何かを聞いてくる場合。今みんなはマスクをしているじゃないですか。一部の日本人の話し声が小さい。もう一度聞き返したら、（一部の日本人が）私の名札をちらっと見て「あ、大丈夫です」と言う。そしてほかの店員に聞く、日本人の店員。（一部の日本人は）私が理解していない、自分の時間を無駄にしたくないと思うから。（しかし、これは）彼ら自身の問題なのに、なぜ逆に。これは逆ギレじゃないか？実は多くの外国人が日本語を分かっている。日本人は自分に対する自信がないのか、それとも何なのか知らないけど。あなたと話すのが面倒くさい、時間の無駄みたい。（このような日本人の）考え方が分からない。たぶんアジアの国の人と接触するのは自分の価値が下がると思っている。（中略）逆に白人は日本で居心地よく過ごせていると思う。今まで接触した白人はほぼ日本に7、8年ぐらい滞在している。日本語も話せないのに、良い生活を送っている。

Fさんはレジで客の言葉が聞き取れず、もう一度聞き返した際に、客がFさんの名札をちらっと見て「あ、大丈夫です」と言い、日本人の店員に聞くという経験を語った。上記のストーリーが示すように、これは日本人客が「外国人だから日本語が分からないだろう」という先入観をもっている可能性を示唆している。客は名札によって、Fさんが外国人である事実を知った後、日本人の店員に聞くという無意識の差別的行動をとったことが分かった。これは、上述したストーリー5と同形のモデル・ストーリーで、外国人/日本語非母語話者であることを理由に仕事の能力が低いと判断された例である。また、「あなたと話すのが面倒くさい、時間の無駄みたい」という語りから、「一部の日本人は外国人と話すことは時間の無駄だと思っている」というFさんの認識世界がうかがえる。その視点から、「彼ら自身の問題なのに、なぜ逆に。これは逆ギレじゃないか？」と強い不満を明確に表している。こうしたFさんの認識に対して、マジョリティ側から、「日本語をしっかりと聴解できない留学生が悪い」といった考えも示されるだろう。しかしながら、さまざまな日本語能力をもつ留学生を社会の一員として実際に受け入れてきた事実に加えて、言語習得と異文化コミュニケーションの難しさを考慮すれば、Fさんのような留学生側の認識世界へ寄り添えるエンパシーを育てる必要があるだろう。

また、Fさんは「たぶんアジアの国の人と接触するのは自分の価値が下がると思っている」と述べ、日本人は日本人以外のアジアの人と接触することで自分の価値が下がると思っていると解釈した。「逆に白人は日本で居心地よく過ごせていると思う」という語りから、Fさんは自分と白人の生活を比べ、優劣があると認識していることがうかがえる。具体的には、「日本語ができない「白人」と比べ、日本語が比較的できるアジアの人は、平等な扱いを受けていない」という認識をもっている。

ライフストーリーを通じて、以上のような語り手たちの認識世界が示された。次の結論で、その認識世界の特徴について簡潔にまとめたい。

5. 結語

本研究では、ライフストーリー研究を用いて、協力者の語りを分析、考察し、協力者の視点

から捉えられる無意識の差別や偏見、とりわけ、差別する側があたりまえに行い、それを差別と自覚していないことが多い「マイクロアグレッション」の実態を明らかにしようと試みた。その結果、協力者の語りから、さまざまなマイクロアグレッションが経験されていることがわかった。まず、疎外感を与える言葉が無自覚に使ったり、曖昧なコミュニケーションを繰り返したりすることで、中国人留学生に不快感や疎外感を与えるものがあつた。また、不自然な日本語に対する日本人（日本語母語話者）の許容度の低さが、否定的な態度で示され、それが留学生にとって心理的なストレスを与えていた。さらに、日本人の中には「日本語能力不足＝仕事能力ない」という思考パターンをもつ者がおり、日本語能力が高くない留学生を見て、「外国人」とであると判断し、外国人であれば「仕事のことが分からない」店員であると位置付けた様子が示された。つまり、「日本語能力の低さ＝外国人＝仕事のことが分からない（個人の能力）」という考え方に基づくマイクロアグレッションであると推察される。この点を図式化すると以下ようになる（図1）。本調査の種々の語りは、図1で示されるような認識パターンをもつ日本人が存在し、「外国人従業員の話は信頼できない」、「外国人との接触はできる限り避けよう」という考えをもっている可能性を示唆している。

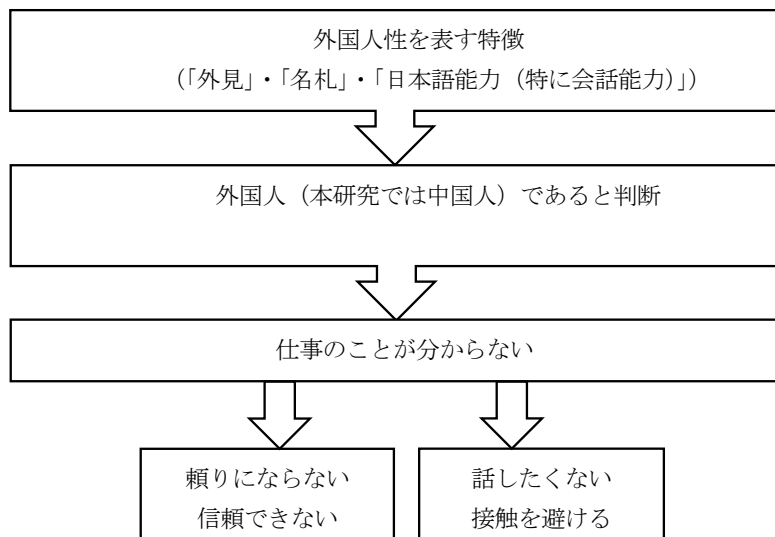


図1 中国人留学生によって認識されている日本人の思考パターン

中国人留学生にとって、日本に順応しようとする過程での日本人との接触は、学校以外ではアルバイト先の日本人に限定され、その接触経験が日本人との関わりの大部分を占めることが多い。一方、アルバイト先の店を利用する日本人客の多くにとっては、留学生との接触は日常生活のほんの一部であり、重要なものではないことが多く、自身のあたりまえの小さな行動が、時として在日中国人留学生を傷つけるという事実を十分に認識していない可能性がある。こうした認識のギャップもあり、マイクロアグレッションは、さまざまな形で留学生と日本人の良好な関係構築を阻害していると推察できる。

本研究で取り上げたマイクロアグレッションは、従来の露骨な差別やヘイトスピーチなどとは異なり、行う側が無意識である場合が多いという特徴があり、明確に差別だと言い切れない、微細な、なにげない日常の言動である。しかし、それを受ける側は、時として傷つけられ、その痛みは、個人のなかで長く記憶される場合もある。マイクロアグレッションは見えにくいいため、言語化あるいは問題化しにくいと考えられる一方、マイノリティの人びとを傷つけるネガティブなインパクトをもちうる。

こうしたマイクロアグレッションを低減するためには、マイクロアグレッションの具体事例とそこで留学生が経験する被差別感とその意味を広く示すことによって、より多くの人びとに、マイクロアグレッションの存在を明確に認識してもらう必要があるだろう。そのため、本研究はライフストーリー・インタビューを用いて、一人ひとりの語りを丁寧に聴き、在日中国人留学生に対して行われているマイクロアグレッションと、マジョリティ社会に埋め込まれている無意識の差別とそれを生み出す認識のパターンがある可能性を示した。こうした知見を蓄積し、日本人と留学生との間での異文化理解と相互理解の促進、ならびに関係の構築に向けて様々な取り組みを行っていく必要がある。

最後に、本研究の限界と今後の課題について述べる。まず、今回の研究において「無意識の差別」という範疇で扱った差別については、意識的か無意識的かどちらかかという線引きが難しいものがあつた。したがって、今後の課題として、意識的な差別と無意識的な差別の区分けについて詳細に検討したい。また、本研究は、調査協力者6名という少人数の在日中国人留学生の語りに基づくものであり、日本社会で生活する他の中国人留学生や多様な在日外国人全体が経験しているマイクロアグレッションの種類やその経験の意味に、今回の結果がどこまで当てはまるかを確認するには至っていない。したがって、今後の課題として、社会人を含めた中国人や他の国籍の人びと、また、さまざまな年代、属性の人びとの語りを収集する必要がある。さらに、今後さらなる研究が必要とされる課題の一つは、ホスト国側あるいはマジョリティ側の集団、つまり、日本人がもつマイクロアグレッションに対する意識・態度・言動ではないかと考えられ、日本人へのアンケートやインタビュー調査も実施するべきだろう。

謝辞

本研究のライフストーリー・インタビュー調査に際しまして、ご多用中にも関わらず、貴重なお時間を割いてくださった調査協力者の中国人留学生の皆様に心から感謝致します。

参考文献

- 池田理知子（2019）「他者との出会い「異なる」と言う意味」塙幸枝・青沼智・宮崎新・神戸直樹・石黒 武人・鳥越千絵・師岡淳也・河合優子（著）『グローバル社会における異文化コミュニケーション 身近な「異」から考える』14-17. 三修社
- 榎井緑（2020）「多文化共生社会と学校教育」『教育科学セミナー』51, 43-58.
- 岡本佐智子（2009）「「不適切な」日本語表現考」『北海道文教大学論集』10, 63-73.
- 上瀬由美子（2002）『ステレオタイプの社会心理学—偏見の解消に向けて—』サイエンス社

- 木下隆児 (2019)「外国人“依存”ニッポン―「ガイジンと呼ばないで」外国にルーツの子どもへのいじめ―」 <https://www3.nhk.or.jp/news/special/izon/20190627gaijin.html> から取得 (2021年11月25日)
- 金友子 (2016)「マイクロアグレッション概念の射程」堀江有里・山口真紀・大谷通高(編)『抵抗としてのフェミニズム 生存学研究センター報告』, 24, 105-123.
- 國枝マリ (2013)「多文化社会の偏見・差別―形成のメカニズムと低減のための教育―」『異文化間教育』38, 148-150.
- 黄美蘭 (2010)「日本語学校に通う中国人学生の被差別感と原因帰属との関連―アルバイト先の事例を中心に」『人間文化創成科学論叢』13, 59-67.
- 厚生労働省 (2021)「外国人雇用状況の届出状況まとめ【本文】(令和二年10月末現在)」
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_16279.html から取得 (2021年1月3日)
- 小坂貴志 (2017)『異文化コミュニケーションのA to Z 理論と実践の両面からわかる』研究社
- 小林健治・多井みゆき・田原総一郎・上滝徹也 (1997)「座談会＝意識される「差別」、無意識の「差別」(特集オープン・ザ・差別)」『GALAC』10月号, 339, 12-19.
- 桜井厚 (2002)『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』せりか書房
- 桜井厚・小林多寿子 (2005)『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房
- スー, D. W. (2020)『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション―人種、ジェンダー、性的指向：マイノリティに向けられる無意識の差別』(マイクロアグレッション研究会・訳) 明石書店
- 野寺綾 (2011)「感情とステレオタイプ化 (特集 偏見とステレオタイプの心理学)」『心理学ワールド』52, 9-12.
- 長谷川典子 (2013)「異文化コミュニケーションの障壁」石井敏・久米昭元・長谷川典子・桜井俊行・石黒武人『はじめて学ぶ異文化コミュニケーション 多文化共生と平和構築に向けて』(pp. 61-80) 有斐閣選書
- 船山和泉・筒井久美子 (2020)「留学生のアルバイト就労経験に関する一考察―留学生を「高度人材」として受け入れる社会を目指して―」『異文化コミュニケーション』23, 49-61.
- 法務省 (2017)「平成29年外国人住民調査報告書―訂正版―」
http://www.moj.go.jp/JINKEN/stophatespeech_chousa.html から取得 (2021年11月25日)
- ホール, E. T. (1979)『文化を超えて』(岩田慶治・谷泰・訳) TBS プリタニカ
- メイヤー, E. (2015)『異文化理解力』(田岡恵・樋口武志・訳) 英知出版
- 八木良広 (2015)「ライフストーリー研究として語り継ぐこと―「被爆体験の継承」をめぐって」『ライフストーリー研究に何ができるか 対話的構築主義の批判的継承』(pp. 143-169) 新曜社
- 李政宏 (2012)「日本の外国人入国政策の変遷と外国人入国の推移」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』1(20), 189-199.
- 渡辺雅之 (2018)「ヘイトスピーチと“カジュアルヘイト”に関する心理学的アプローチ：社会の中に埋め込まれている無頓着な差別的言動」『教育研究紀要』9, 33-47.

劉 薇 武蔵野大学大学院言語文化研究科修了生・パナソニック株式会社 社員
石黒 武人 立教大学異文化コミュニケーション学部 准教授

付録

<あなたのプロフィールについてお聞きします>

【問1】 あなたの性別をお答えください。

- ①男性 ②女性 ③その他

【問2】 あなたの生まれた年をお答えください。

- ①10代 ②20代 ③30代 ④40代

【問3】 あなたは、現在どこで勉強していますか。

- ①大学 ②大学院 ③専門学校 ④日本語学校

【問4】 あなたは、いつ日本に来ましたか。

西暦（ ）年

【問5】 あなたの言語能力を教えてください。（ ）に順番を付けてください。

（ ）中国語・普通話

（ ）方言

（ ）日本語

【問6】 以下の言語の使用頻度を教えてください。（ ）に順番を付けてください。

（ ）中国語・普通話

（ ）方言

（ ）日本語